

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

Vol. **67**
2016

特集

密着！ 博物館の仕事



Contents

- 新館長・副館長紹介
- 博物館活動報告 — 2016年度 秋の企画展 再葬墓と甕棺墓—弥生の墓の東西—
- 展示&リサーチ — 譜代大名内藤家と戦—内藤家文書をつうじて—
- 学芸研究室から — 伝統工芸が映す次世代の価値観
- 市民レクチャー — 瓦と文字 —「大伴五+戸」と記銘された軒丸瓦—
- 収蔵室から — 縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器 / ~「達」~ 江戸の火災と火元見の禁令
- 南山大学協定通信 / 図書室から
- 博物館入館者数の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から

植輪の接合から復元まで
(玉里舟塚古墳ほか 当館蔵)

特集

密着！ 博物館の仕事

●学芸員の仕事

展覧会場という一般社会にオープンな場所から連想されるばかりではなく、博物館のバックヤードでは日々さまざまな業務が進められています。世の中のあらゆる事物のその背景には高度なプロの仕事が存在するわけですが、それは博物館も同じなのです。日本語では「学芸員」というたった一つの肩書に込められた職務の専門性が実に多様であることは、一般に認知されることがあまり無いような気がします。今回の特集では知られざる博物館の現場に潜入してみましょう。

●ある日の仕事 A学芸員の場合

	①4月25日(月)	②6月10日(金)	③7月28日(木)
8:00			8:20出勤 定期試験監督
9:00	9:00始業 翌日の講座で使用の 映写スライド作成	9:00始業 9:30新収蔵資料展 撤収のつづき	調査計画の立案と 旅費申請書類作成
10:00		10:30定例会議	
11:00			
昼休			
12:30	5月下旬からの 博物館実習生受入 計画作成	中野キャンパスへ 「文化資料学」出講	次年度計画学長ヒア リング当日配布資料 の仕上げ、印刷、担当 部署への提出
13:00			
14:00			
15:00	ボランティア展示 解説員研修の 資料作成	次年度計画について会議	収蔵施設防虫処理施 工準備の立会
16:00		週明け6/13(月)か らの調査準備、情報 収集	防虫剤投入の立会
17:00~			

さまざま
仕事があるね。



- ① 新しい年度のはじまりは一般向けの博物館入門講座の開講から。今年度は5月中旬から始まるボランティア解説員研修の内容も一新することにしたが、存外な大仕事で多くの時間を割くことになった。これらに関わる調査研究は今後の展示企画への活用を念頭におこなうことで業務サイクルの効率化を図っている。
- ② 6月8日に会期を終了した新収蔵資料展の展示撤収。この月は次年度教育研究計画の取りまとめが部署の大きな課題だが、在学生対象の講義も学芸員が分担して対応している。合間に調査出張も入った。そろそろ7月末からの展示の資料選定を終え、解説執筆にも取りかかる必要があるが、なかなか手が着けられない。
- ③ 7月25・26日に夏の企画展の列品作業。準備は遅れ気味だったが何とか間に合った。27日に南山大学との合同研修会を終えたところ。定期試験の監督といった大学職員共通の業務もあり、夏期休暇期間中に実施する教員と同道しての調査準備もぎりぎりのタイミングとなった。上半期の収集資料が入ったところで収蔵設備の防殺虫処理。

●展示の企画・借用・列品

展示は博物館で最も重要な仕事のひとつです。日々の研究や整理作業をもとに、企画を立案します。開催の意義やタイムリー性、またどのように資料を配置するかなど、様々な条件を勘案します。当館では、特別展示室で行う特別展や企画展と、常設展示室のケースを使うコラム展がありますが、特別展はその年の館活動の顔ともなるもので、数年かけて準備します。企画展は館蔵資料を中心にしたものと、学内の教員や組織、外部団体が主催するものがあります。後者の場合でも単に会場を提供するだけではなく、アドバイスや調整など様々な形で関わります。外部機関から資料を借用する際には、一年ほど前から所蔵元と交渉して許可を取り、実際の借用時には美術品輸送専門の業者と慎重に作業にあたります。大変な費用がかかりますが、資料の安全が最優先です。制作した展示パネルやキャプションとともに、傾きやバランス、耐震などに配慮しながら細心の注意を払って資料を並べ(列品)、ようやく開催となります。特別展では、さらにチラシや図録の制作、開幕式や記念講演会の準備と実施が加わります。



甕棺の列品風景



錦絵の列品風景

●展示・収蔵環境の整備

四季の気候の変化に富んだ我が国は、物質の劣化を防止して後世に伝えるという点では難しい環境にあります。夏期の高温多湿は微生物を活性化しカビや害虫の発生を促します。冬期の低温乾燥もまた木や紙といった素材の変形、顔料・塗料の剥落につながり、暖房による寒暖の差は結露を生じさせます。また、光線は常に物質の表面劣化を促進します。空気環境が酸性・アルカリ性のガスに汚染されるのもよくありません。酸は金属成分を腐食し、アルカリは色素を脱色させます。これに対処するには、施設の空調を適切に管理し、防カビ・防虫処置に常に気を配る必要があります。保存容器や梱包にも劣化しやすい素材は避けたいところです。短期的にはただちに影響を及ぼさなくとも、100年200年という遠い将来を見通してのモノの現状維持を考えると、見た目には何の変化も実感できない地道な作業を続ける必要があるのです。



ゼオライト(人工活性炭)入りのシートで汚染物質を除去



温湿度をモニタリングしているデータロガー



●コレクションの形成

当館のコレクションは、100年以上にわたる大学の研究の過程で学術資料として収集されたものであり、購入や寄贈、発掘調査によって充実が図られてきました。購入の場合は、まず当館のコレクションと方向性が合致し、教育研究に高い効果が期待できる資料を学芸員が選定します。そして館内での検討を経たうえで本学の教員で構成される資料評価会議で購入の妥当性をチェックし、承認が得られたもののみを購入します。購入資料は年に数十点程度ですが、寄贈資料は数点単位から、多いものでは数百点に及ぶものもあります。特に近年は、時田昌瑞ことわざコレクションや前場幸治瓦コレクションなど、1万点にも達する大型の寄贈がありました。寄贈を受ける際にも、事前に学芸員が内容をよく調査し、当館の方向性に合うものだけを選んでいきます。そうでないものについては、より資料の活用が期待できる他の館園を紹介するなどしています。こうすることで、コレクションの特色が維持され、さらに内容を充実させていくことができるのです。

●資史料の整理・調査

博物館には30万点を超える資史料があります。1点ずつ内容をきちんと把握しなければ、管理する事も活用する事もできません。このため、博物館では常に収蔵品の整理・調査を行っています。整理・調査の方法は対象によって異なり、それぞれに学術的な方法論が蓄積されています。例えば、表紙の写真は埴輪の接合から復元までの様子です。

それでは、古文書を例にとって整理・調査の流れを紹介しましょう。古文書は組織や家を単位に生み出され、多くの場合、数百点、数千点とまとまって伝わっています。写真は整理前の古文書の様子です。調査にあたっては、旧蔵者の元での管理状況を後で確認できる様にするため、まずは、古文書の搬入時の記録や、写真の様な塊毎の概要の記録を作成します。つづいて、1点毎の古文書を読み解き、表題・内容・差出・宛先・作成年代などを書き上げていきます。古文書は史料番号を記した保存用の中性紙封筒に1点毎に入れ、さらに保存用の中性紙の箱にまとめて、収蔵庫に配架します。個々の古文書が把握出来たら、古文書群全体を理解するというステップに進みます。調査の対象であるその古文書が、どの様な組織や家から、どういう経緯で生み出されたのかを分析するのです。最後に、一点毎の史料の情報、文書群全体を解説する解題を収録した目録を作成して整理・調査は終了です。



整理前の古文書

●研究活動

当博物館には4名の学芸員が働いていますが、それぞれが専門分野での研究活動をバックボーンにして学芸業務を行っています。

2016年度は博物館の収蔵資史料研究に関連する5件の科学研究費助成事業を受けており、6月1～3日には、考古部門の島田和高等学芸員が、黒曜石の島としても知られるイタリアのリパリ島で開催された国際黒曜石会議に参加しました。この国際会議では、黒曜石産地分析の手法に関する研究と地域的な先史黒曜石研究に関する発表と討論が行われ、島田学芸員も研究発表を行いました。

この様な学会発表以外にも、各人が学術雑誌での論文の発表、著書の刊行などを行っており、これらの研究成果を展示や講座、収蔵品の適切な管理などに反映しています。



国際黒曜石会議での発表の様子



国際黒曜石会議のポスター看板

新館長・副館長紹介



博物館 館長 村上一博(明治大学法学部教授)

本年4月1日付けで館長に着任しました。小疇尚文学部教授・杉原重夫文学部教授・風間信隆商学部教授に続く、第4代目の館長になります。専門は日本法制史、とくに明治以降におけるフランス民事法の継受と法曹の育成を研究テーマにしていますので、明治大学史の研究にも携わってきました。学内外により一層開かれた博物館にしたいと考えています。

博物館 副館長 李英美(明治大学商学部教授)

本年6月より副館長を勤めさせて頂くことになりました。専門は韓国法制史で、韓国伝統法の近代化過程における日本法の影響や法学教育及び法律家の養成など、法の継受や相互影響関係、韓国法と日本法の間を中心に研究しています。今後は博物館においても、韓国との間の相互交流や展示会の共催など博物館のグローバル化に積極的に取り組んでいきたいです。



● 博物館活動報告

MUSEUM EYES

2016年度 秋の企画展

再葬墓と甕棺墓 - 弥生の墓の東西 -

日時:2016年10月22日(土)~12月18日(日)
主催:明治大学博物館
会場:博物館特別展示室 入場無料

弥生時代にはさまざまな墓が営まれましたが、そのなかでも東日本の再葬墓と北部九州の甕棺墓は、他の時代にはあまり見られない葬法であり、際立った存在であるといえます。再葬墓は、遺体を土中に埋めるなどして骨化させた後に、いくつかの骨や歯を土器に入れて埋葬したものです。一方の甕棺墓は、棺として使うために製作した巨大な土器の中に遺体を入れて埋葬した墓です。

明治大学は、1950年の考古学専攻創設前後から再葬墓の研究に取り組み、1964年の千葉県岩名天神前遺跡の発掘調査で初めて土器を用いた再葬が行われていたことを突き止めるなど、多くの成果を上げてきました。また比較研究を目的に九州の甕棺墓の調査を行うとともに、王墓や上位階層クラスと目される甕棺墓から副葬品として出土する中国鏡の収集も行ってきました。中国鏡は被葬者の身分や大陸との交流を知る手がかりとなるだけでなく、製作年代の推定が可能であることから、日本列島の弥生時代の年代を決める際の重要な鍵ともなっています。

今回は、当館が収蔵する関東の代表的な再葬墓資料、北部九州の甕棺墓資料、そして弥生時代並行期の中国鏡コレクションを一堂に展示し、東西の墓制の違いとその特徴、弥生時代の年代観について紹介します。岩名天神前遺跡の主要資料が一度に公開されるのは約半世紀ぶり、また当館の甕棺墓資料全点が公開されるのは初となります。



群馬県岩櫃山遺跡第14例土器

バラバラにした骨を納めたと考えられる土器。この遺跡の調査は、明治大学の再葬墓研究の端緒となった。



佐賀県桜馬場遺跡1号甕棺

大型の土製棺。桜馬場遺跡では魏志倭人伝に登場する「伊都国」の王墓と推定される墓が確認されている。



方格規矩四神鏡(後漢、中国製)

外側の円は天を、中の方形は地を意味し、宇宙そのものを表す。日本列島の甕棺墓や古墳で出土例がある。

*2016年度特別展として予定されていた「気候変動に人類はどう適応したか」は来年度以降に順延となりました。

譜代大名内藤家と戦 — 内藤家文書をつうじて —

日比 佳代子 (明治大学博物館 刑事部門学芸員)

1 「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」と「譜代大名内藤家と戦展」



展示会の看板

内藤家は、延享四年(1747)までは陸奥国磐城平(現・福島県いわき市)、それ以降は日向国延岡(現・宮崎県延岡市)を領知とした七万石の譜代大名である。現在、内藤家に伝来した古文書—内藤家文書—は明治大学が、道具類は延岡市 内藤記念館が所蔵している。

明治大学では内藤家文書のさらなる研究利用促進と、内藤家の旧領である宮崎県や延岡市へ研究成果の還元を目指して、2011~2015年度に「内藤家文書研究の促進及び旧領延岡市との交流事業」を行った。研究促進事業では、延岡市 内藤記念館と共に内藤家文書の調査・研究を行い、交流事業では、明治大学関係者が出前授業や講演会などを行うアウトリーチ活動、宮崎県・延岡市の高校、中小学校生を対象とした作文コンテストを実施した。

延岡市 内藤記念館と行った研究促進事業では、その成果を展示会や当館紀要などで公開してきたが、事業の締めくくりとして、2016年6月18日から7月20日まで、明治大学博物館、延岡市 内藤記念館の共催で、武士としての内藤家に焦点をあてた展覧会を行った。入場者数は2,096名であった。

展示の構成は、右表の通りで、両館の収蔵品の性格とこれまでの調査活動の内容に合わせて、それぞれの館が章を分担した。近世の武具は、初期には実戦の道具であったが、太平の世になり実戦で使用する機会が無くなっていくと、武威を示す象

章立	担当館
1.内藤家の歴史	明治大学博物館
2.内藤家と武具	延岡市 内藤記念館
3.内藤家と近世初期の戦	明治大学博物館
4.延岡藩と幕末の戦	延岡市 内藤記念館
5.延岡市 内藤記念館の紹介	延岡市 内藤記念館

徴的な性格が強くなる。一方で、幕末期に再び実戦に向き合う事になると、このような象徴的な存在としての武具は、既に本来の機能を果たし得ず、近代的な武器の整備が急務となる。本展示では、譜代大名内藤家を素材に、戦をめぐる、そして、武具・武器をめぐる、この大きな変化を描いた。

内藤家の場合、家の由緒を語る際に重要な人物は、伏見城の戦いで討ち死にした内藤家長であり、家長が使用したと伝えられる弓は、後に家の由緒を示す象徴的な意味を与えられていく。なお、内藤藩は、寛政十一年(1799)に延岡で家長とその子元長の二百回忌法要を行い、享和元年(1801)には家長と元長の霊神勧請をして、江戸の六本木屋敷に奉っており、この様な点からも内藤家及び内藤藩にとっての家長の存在の重要性を窺う事ができる。では、神格化にまで至る内藤家長と伏見城の戦いとはどのような戦いだったのだろうか。

2 徳川家康の天下取りと内藤家長

譜代大名の内藤家にとって、参戦した戦は、そのまま徳川家の政権獲得までの道のりと重なってゆく。もともと内藤家は、三河国碧海郡の矢作川西方に位置する姫郷の国人領主で、重清の代に松平宗家に服従し家臣化したと考えられている。内藤家文書に残された家譜系図類は内藤家の初代をこの重清の子義清とする。義清は松平信忠、清康に仕え、岡崎五人衆と称した。義清の孫にあたる家長は徳川家康の部将として戦功をあげ、天正18年(1590)家康が関東に移封すると、上総国天羽郡佐貫に二万石を拝領した。

慶長三年(1598)に豊臣秀吉が病死した後、五大老と五奉行による政治体制が取られるが、徳川家康は前田利家の死、加藤清正、黒田長政らによる三成襲撃事件をへて着々とその勢力を拡大してゆく。慶長五年、家康は上洛を拒否した上杉景勝を打つため、会津攻めを決し、六月一八日に鳥居元忠、内藤家長ら僅かな軍勢を残して伏見城を発した。家康は、三成の挙兵を促すために、あえて上方を離れたのである。家康は、三成の挙兵を想定しており、別れを惜しみつつも鳥居元忠に留守居として城を預けたと言われる。内藤家長もまた同じ状況であった。家長は、自分が死んでも嫡子の政長が家を継続でき、徳川家が政権を握ったならば、死を掛けて伏見城に籠城する家長の忠義に添えて、かならず家をもり立ててくれると考えただろう。一六歳の息子元長を連れて伏見城に籠もった家長は、徳川家康に内藤家の命運を掛けたのである。

家康の上方不在に対し、佐和山城に蟄居していた石田三成が挙兵し、前田玄以、増田長盛、長束正家の三奉行がこれに応じて七月一七日に三奉行連署で家康への弾劾状を発給した。一九日、三成らの西軍は大軍をもって伏見城を攻め囲み、八月一日に城は落城、家長と元長も戦死する。家長・元長の首級は、家来によって密かに運び出され、近江国大津の大練寺に葬られたと言う。その真偽はともかく、伏見城での家長・元長の戦死は、家の核となる“物語”であり、この戦功が、内藤家の大名としての成長をもたらすのである。

3 関原合戦画卷

関ヶ原合戦絵巻は、慶長五年(1600)の関ヶ原の合戦について、石田三成の挙兵から石田三成勢の総崩れまでを描いたものである。同内容の絵巻が複数存在するが、原本は確定されておらず、上下巻本である場合が多い。内藤家伝来のものは「関原合戦画卷」の名で、伏見城の戦い部分を含む上巻のみである。本品は、1993年に内藤政道氏から寄贈をうけた史料の一つで、箱裏書きに「明治廿一年十二月原時行氏ヨリ到来」とある事から、明治期に内藤家が入手したものと考えられる。

この絵巻には、関ヶ原合戦の様々なエピソードが登場人物の名前と共に劇的に描かれており、伏見城攻めの場面は、伏見城を囲む西軍、開戦、城に乗り込む西軍、応戦する内藤家長、落城する伏見城と鳥居元忠、と進む。『伏見戦記』は、伏見城落城の様子を「諸手ヨリ攻入(中略)、松ノ丸ヲ焼立、本丸へ攻掛ル、城中防兼テ、或ハ討死、或ハ自害メ、八月朔日未刻落城ス」とする。家長と元長は松ノ丸で十九名の家臣と共に討ち死にしている。

関ヶ原合戦絵巻では、内藤家長は敵勢を弓で射貫く姿として描かれている。家長は弓の名手として語られる人物で、『寛政重修諸家譜』は家長を「力量人に勝れ、騎射の達者なり」とする。伏見城攻めにおける家長の姿が、弓で奮戦する姿として描かれているのは、家長=弓というイメージが当時浸透していた事を窺わせる。そういった象徴的なイメージを的確に描く事に、絵画資料に期待された役割があったのであろう。関ヶ原合戦絵巻には多くのエピソードが盛り込まれ、多くの武将が登場する。このような絵巻が、鑑賞する人々に関ヶ原の合戦をより印象的なものとして記憶させ、共有化に貢献したであろう事は想像に難くない。

参考文献 外山徹「内藤藩における藩祖家長と息子元長の霊神勧請関係史料について」(『明治大学博物館研究報告』19)

展示図録 『大関ヶ原展』(東京都江戸東京博物館、京都府京都文化博物館、福岡市博物館、テレビ朝日編集、2015年)

史料 「関原合戦画卷」(内藤家文書内藤政道氏寄贈分6-5、縦45横1510)

『伏見戦記』(内藤家文書1-31-42、縦30横22.5)

関原合戦画卷(部分)



落城する伏見城と鳥居元忠

弓で敵を射貫く内藤家長

伝統工芸が映す次世代の価値観

備前焼における作家活動

今回は、商学部教員との共同により2013年度から3ヶ年の計画で進めてきた備前焼(岡山県)の調査・研究が一段落ついたところで、そこから得られた知見から話をはじめたい。

産地に足を運んだ当初、大いに戸惑った点がある。他の産地では、製造者は通常“窯元”と呼ばれ、産地とは〇〇窯と名乗るメーカーの集合体である。ところが、備前焼の製造者の圧倒的多数は個人の名前を名乗っているのである。他の産地の場合も、窯元の当主が個人名で作陶活動をおこなうことはあるが、先立つのは窯元の名である。しかし、備前焼の場合はあくまで個人名が中心なのである。なぜだろうか？この状況を理解するには時間がかかった。同姓の作家が目につくが、「金重」「木村」姓は窯屋六姓と言って旧藩時代に窯仲間を形成していた家系に発している。つまり、本家筋が窯元経営を継承しつつ、分家筋が独立して個人作家となっているのだ。一方、「藤原」姓は本学OBである故人間国宝藤原雄氏の家系である。窯屋六姓の系譜ではなく、同じく人間国宝であった先代の啓氏が作陶の道に入った。



備前焼の産地 (JR伊部駅前)

外山 徹 (明治大学博物館 商品部門学芸員)

この備前焼の作家活動のスタイルを確立したのが故金重陶陽らである。陶陽は窯屋六姓の傍系に出生(1896年)、父に師事して細工師の道に入るが、茶陶として高い評価を受ける桃山古備前の復元を志した。土の配合や焼成方法の研究を重ね、昭和10年代にその製法を確立、1956年、備前焼最初の人間国宝に認定されている。藤原啓、また3人目の人間国宝となる山本陶秀らがこの作家活動の第一世代と言え、現在、その3世代目が中堅作家として活躍している。明治・大正の頃は青色吐息であった備前焼が一躍評価を高めた要因がこの第一世代の作家らによる古備前スタイルの作陶であったが、1952年の岡山県備前焼陶友会発足時の会員数が約40名であったことを考えると、現在、作家400名とも言われる産地規模の拡大は、昭和戦後期から平成初頭にかけての半世紀余りに達成されたことになる。このような急拡大は他産地に類例を見ないが、昭和戦後期における「伝統工芸」の躍進が極端に表れた事例と言えらる。

備前焼はなぜ伝統工芸たり得たか？

「伝統工芸」という概念は、実はそれほど古いものではなく、むしろ近代の産物として昭和戦後期に確立されたという見解が現在では主流となってきた(註)。その意味で、備前焼のこの躍進は「伝統工芸」の成立過程という点で非常に興味深い動向である。備前躍進の契機が桃山古備前の復興にあったことは間違いなく、同時期に美濃焼の志野・織部などの茶陶も同様に評価を高めていた。大陸進出という国策との関わりからナショナリズムを高揚させるため、つとめて日本的な美というものの発掘が試みられた背景が指摘される。国策自体の行く末は不幸なものとなったが、結果的に桃山調の歴史的・文化的所

産という評価は固まり、それは欧米との間に緊張感が高まっていた“時代の要請”の賜物であった。

備前焼に特筆すべきは、昭和戦後期において「伝統工芸」の概念形成の主因となった重要無形文化財認定事業に関し、同一産地からは最多の5名の人間国宝(重要無形文化財保持者)を輩出していることである。多くの保持者を輩出した理由として、その製法上の制約性が指摘できる。桃山調のざっくりとした風合いを表現するためには、原土の調合は全くの手作業でおこなう必要がある。成形技法もロクロないし手捻りに限られる。さらに、焼成は薪窯焼成によるしかない。原土調整の仕方から圧力鑄込みには向かず、焼成時の収縮率にもむらが出るため均一な形状をコントロールできず、そこには量産を志向した近代的製法の入り込む余地がない。



備前無釉焼締陶の風合い

近代国家の建設過程において、工業の近代化は不可避であった。それは高度経済成長期における大躍進に至るまで不変の原理であった。誰にでも真似ができないことで価値を認められた職人技は、ボタン一つで誰にでも操作できる機械に取って替わられるが、安価な製品を大量に生産して普及させ、人々の生活水準を上げる必要のある時代にはこれは必然であった。それに対応できない備前焼はしばし雌伏を強いられたが、桃山古備前の復興により「伝統工芸」という付加価値を帯びた商品という市場を開拓し蘇生したのである。

今日では、廉価であることを消費価値とする製品は伝統工芸の世界では存在し得ない。生き残る資格があるのは相応の付加価値をとまなう備前焼のようなスタイルということになった。備前焼の付加価値は桃山調の風合いであるとともに、作家のパーソナリティにある。製法の制約から全般として似通ったイメージながら、仔細に観察すると、各々の作風の相違を見出すことができる。ソーシャルメディアの発達によって、テレビCMや新聞雑誌への広告掲載といった手段に訴えずとも、個々の作家が自らを

アピールする機会が得られるようになり、消費者が流通経路に依存することなく製造者にアクセスする回路ができたのも今日的な特徴である。

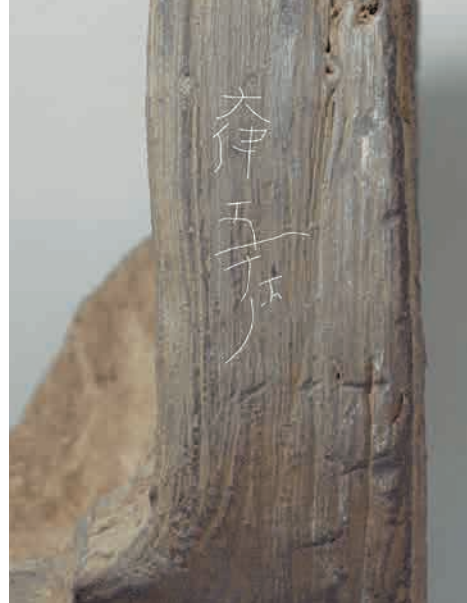
個々の尊重と多様性の社会へ

さて、話の舞台はがらりと変わるが、イギリスの製陶産地の中心ストーク・オン・トレント市の博物館では、イギリス製陶史をたどる同国有数の展示を見ることができる。ウェッジウッドやスポードなどのブランドで知られる18～19世紀における磁器製造の時代こそが当地のハイライトかと思っていたが、続く20世紀の展示では色どり形状もさまざまな施釉陶器がならんでいた。日本の民藝運動にも大きな影響を与えたバーナード・リーチをはじめ、マイケル・カーデューやルーシー・リーなどよく知られた陶芸作家に混じって益子焼の濱田庄司の名もある。工業技術的にはあきらかに前近代への逆戻りであるが、そこで気付いたことがある。確かに前述の磁器産業は、産業革命の時代における工業大国化という、まさに“近代”を象徴する存在であった。そこでは高効率な製法の導入によって同一の形状、同一の絵柄の製品が大量生産され、製造に携わる労働者は匿名の集合体であった。しかし、Studio Potteryと呼ばれる陶芸作家の作品は、それとは対極の発想にあることがわかる。そこで価値の中心をなすのは姓名のついた「個人の創造性」である。

それは当地における近代から現代への移行に際しての価値観の変化であるように思われる。恐らく、備前焼に関する調査を経なければ、こうした理解は得られなかったのではないかと思うが、このことは備前焼に限らず伝統工芸の付加価値というものが現代社会における普遍的価値観の反映を意味していることになる。

近年、博物館の歴史展示においても、Grand narrativeという客観的かつ大局的な見方から、Oral history、つまり個々人の体験談を重視する方向へという方法論の転換が指摘されている。個々人が尊重され多様性を許容する社会の構築が課題とされる今日において、人が使う道具にあっても人格の尊重同様の考え方がなされる時代が到来しつつあると言えそうだ。

(註)例えば、木田拓也『工芸とナショナリズムの近代』(吉川弘文館、2014)など。



前場幸治瓦コレクションの「大伴五十戸」軒丸瓦(右の写真は文字部分を白く加工している。撮影:清地良太、当館蔵)

が、文字は紙でも木でも記銘する対象(モノ)がなければ現存しない。この当然の前提を考慮すれば、モノから得られる情報も文字からの情報と同じく重要で、記銘された軒丸瓦のことも忘れてはならない。両者の情報から何がわかるのか、軒丸瓦の年代から考えてみよう。

この軒丸瓦の年代を五十戸の記銘以外に求めると、情報源は瓦の文様と作り方、瓦を焼いた窯で共伴した土器の年代となる。ページの都合で年代のみを述べると、瓦の文様からは7世紀末～8世紀前葉(1世紀を前・中・後葉で3区分した年代)、作り方からは7世紀末以降、共伴した土器からは8世紀初頭が導かれる。三者の年代から、軒丸瓦の年代は8世紀初頭となるが、これでは五十戸から導かれた年代と最短でも20年前後の差が生じてしまう。

「五十戸」と記銘された瓦は、大阪府柏原市の高井田廃寺、栃木県那珂川町的那須官衙遺跡(那須郡衙正倉)でも出土するが、これらの瓦から求められる年代も7世紀末～8世紀前葉で、同じような結果となる。また、愛知県の須恵器の窯では、須恵器に記銘されたサトの表記が8世紀前葉に五十戸から里へ変化する。平城宮でも当初の造営に関わり、「五十戸家」と記銘された須恵器が出土する。

どうやら税の荷札木簡と瓦や土器では、サトの表記に時期差があるようだ。この差を文字資料から求めた年代と考古資料から求めた年代の差と決めつけずに、記銘されたモノの差で捉えたいかがであろう。税の荷札木簡への記銘を国家的な制度に基づく公的な記銘、瓦や土器への記銘を一般庶民に浸透していた従来からの記銘と解釈すれば、公的にサトの表記が里となっても、その表記が一般へ浸透するには時間を要したことがわかる。見方を変えれば、8世紀前葉にそれまで不徹底であった表記が徹底されたと理解できるので、

ここに国家による地方支配の画期が見て取れる。このように、モノを含めて記銘内容を検討する場合、資料の扱いは金石文や出土文字資料といった文字を第一義とする扱いよりも、文字とモノを総体化した記銘資料という概念で扱いたい。

「明大考古学」の礎を築いた杉原荘介は、歴史学の分野として考古学を原史学、文献史学を本史学として相対的に捉え、考古学の時代区分への文字資料の利用を戒めた。その一方で、「文献存在以後においては、なんといっても古文書学を第一の基礎とせねばならないのであり、この時代の歴史的状態は、すでに今後は大いなる転換をみぬ程まで完備されてきているのである。」とあって、歴史時代の存在を認め、歴史時代での考古学を脇役に位置づけた(杉原荘介『原史学序論』)。

脇役とするのは、杉原のみならず考古学・文献史学ともいまある見解だが、今回の話題からもわかるように、このような考古資料と文字資料の関係を一度仕切り直す必要がある。その上で、今回示した文字の使用を前提にした考古資料、記銘資料という資料論を用いて、日本の古代史を究めることも一案である。とくに、前者の視点で時代区分をおこなうと、考古学の立場から、日本古代における文字使用と社会構造の変化が追える。L.H.モーガンやF.エンゲルスの論はひとまず置いて、考古資料からいかなるパラダイムが生れるのか。「言之易而行之難」。筆者には過分な課題である。

以上、前場さんの軒丸瓦から学んだことを、出雲での文字瓦調査の晩、地酒を片手にまとめてみた。

縄文時代晩期の亀ヶ岡式土器

青森県つがる市にある国指定史跡の亀ヶ岡遺跡は、たくさんの土器が出土することで江戸初期から全国に知られていた。地元の北畠家の家記『永禄日記』には、昔から瓶が多く出ることになんでこの地を「亀(瓶)ヶ岡」と名付けたことが記されている。そしてこの遺跡に由来して、東北地方を中心とする縄文時代晩期の土器を総称し、亀ヶ岡式土器と呼んでいる。明治大学博物館には、考古学博物館時代に収集(1952年)した鉢形土器、浅鉢形土器、壺形土器、注口(ちゅうこう)付土器など33点が展示・収蔵されている。



写真1: 注口付土器(A-7)

亀ヶ岡式土器の特徴は、深鉢形・浅鉢形・台付形・壺形・皿形・注口付(写真1)・香炉形など、多種多様な形態の土器が出土していることである。それら

は、①日常の煮炊きを使う粗製土器②食器や貯蔵用として使う半精製土器③祭祀などの特別な行事に使う精製土器というように用途・目的に応じて作り分けていたと考えられている。特に祭祀など重要な場面で使用されたと思われるものは、器面に施された文様も装飾性に富んでいる。透かし彫りや小突起を用いたデザインなど手が込んでいるもの、赤色漆・黒色漆で彩色されたもの(写真2)、器面を丁寧に研磨されたものなどがあり、製作技術が優れていたことも挙げられる。容器の機能面の向上に芸術性が加わり洗練されていったのは、呪術にまつわる要素が強く反映されたためと考えられている。



写真2: 壺型土器(A-19)

文様の変遷については、岩手県大船渡市大洞(おおぼら)貝塚の発掘調査結果に基づいて、古い順に大洞B・BC・C1・C2・A・A'式の6型式に区分されている(図参照)。主体文様は、大洞B式が三叉状入組文、BC式が羊歯(しだ)状文、C1式が磨消(すりけし)縄文の技法による大腿骨文となっている。磨消縄文とは、縄文の上に沈

線で文様を描き、余分な部分を磨り消すことで残った部分を浮き上がらせる技法のことである。この頃になると優品が多くみられ文様帯も拡大し、亀ヶ岡式土器が最も盛行した時期といえる。C2式になると、退化の兆候が見られはじめる。磨消縄文の雲形文が主体となるものの、文様帯が狭くなり、全体的に曲線から直線的な傾向にシフトしていくようになる。A式では、磨消縄文が減少し、より直線的な工字文を主体文様とし、文様帯がさらに狭くなっていく。A'式は、変形工字文が主体文様となる。これは、工字文が上下に三角形に伸びて文様帯が拡大された形に変化したものである。これらの文様には様々な祈りが込められ、その呪術的な力でまつりの霊性を高めることを期待したと考えられている。

亀ヶ岡遺跡からは、土器のほかに土偶・岩版・石棒など祭祀に関係するもの、勾玉などの装飾品、漆製品や木製品などの優れた製作技術を必要とする遺物が発掘されている。このことから高度な技術をもつ社会でありながらも呪術が統治した社会という相異なる要素が相乗して社会を発展させていったことが窺われる。ある意味では物心ともに豊かな暮らしを送っていたと言えるかもしれない。

(海沼真澄)



大洞B式



大洞BC式



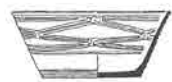
大洞C1式



大洞C2式



大洞A式



大洞A'式

図:亀ヶ岡式土器文様図

(黒沢1991
「総論・縄文時代晩期概観」より
縮尺不同)

参考文献

- 明治大学考古学博物館 1991年
『明治大学考古学博物館蔵品図録2 縄文晩期の世界』
- 青森県教育委員会 1990年
『図説ふるさと青森の歴史シリーズ3 北の誇り・
亀ヶ岡文化縄文時代晩期編』
- 戸沢充則編 1985年『探訪縄文の遺跡東日本編』

～「達」～ 江戸の火災と火元見の禁令

江戸の町で、火災が頻発していた事は有名だろう。江戸時代の建物は、木造建築が主である。また、大都市江戸は建物が密集しており、一度付いた火は瞬間に近隣家屋へと広がった。(1)

江戸三大大火の一つ、明暦の大火(明暦3年(1657))は、赤坂・四谷を除く当時の江戸の大半の地域を焼いた。詳細は不明だが、死者は10万人を越えたと言われる。この大火以降、幕府の防火対策がよりいっそう進む事となった。対策としては、都市改造、消防組織の編成、法令の発布等が挙げられる。

まず都市改造では、武家屋敷の城外移転・寺院の郭外移転が行われ、町屋地には広小路や火除けの広場が設けられた。また、人々の避難の為、隅田川に大橋(後の両国橋)がかけられ、武家屋敷の移転に伴って町人地も移転。本所・深川一带に旗本屋敷や町屋が広がった。(2)次に消防組織として、従来から存在した大名火消に加え、大火の翌万治元年(1658)に、幕府直属で常置の定火消を設置する。定火消には旗本が任命された。また同年、町地火災時に町方人足の出動が命じられ、町火消の始まりとなった。(3)そして、法令の発布では、火消し制度や消火に関するもの、防火・警火令と幅広く数多くの法令が出された。『徳川禁令考』(4)には、95の消防法令が掲載されているが、未掲載のものも含めれば、その数を上回る事は言うまでもない。

ではここで、当時発布された法令の一つとして、当館所蔵の史料から「達」(5)(写真1)を紹介しよう。本史料は、天保15年(弘化元年(1844))正月に幕府が大名へ発布した法令を記す、大目付廻状の写しである。(6)

史料の内容をまとめると、「これまで度々、火事の際の火元見を禁じてきたが、再び乱れてきている。その為、これを再

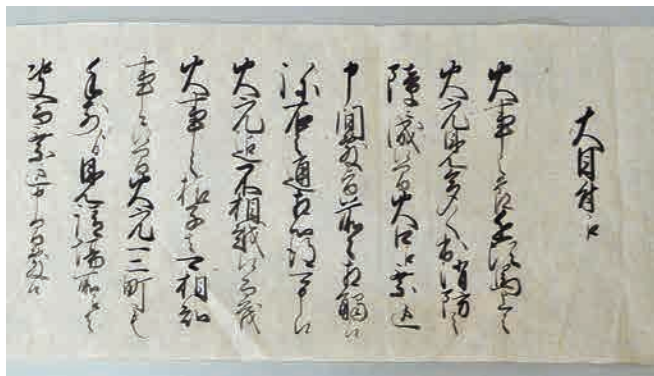


写真1:達

達	
年月	内容
文政12年 (1829)	火事の際に馬で火元を見に行く者が多く、消防の妨げになっている。 前々も触れたように 火口へ乗り込んではいけない。(火事の様子は)火元十二町手前より見る事。また、定火消や防火大名で詰場に詰めている者の内、火元見を遣わす者がいるが、今後は乗馬では勿論、その他の火元見も遣わす必要はない。
年代不明 正月	文政十二年に、火元を見に行ってもいけないと禁じたにも関わらず、近頃みだりになって火近くの場所へ乗り込んで消防の妨げになっているので、これを心得、間違いがないよう必ず家中へ申し付けること。
(天保15年 (1844)) 正月	出火時の見物らしき者を前々も禁じているが、またみだりになっている。親類等の家(の火事)を見舞い手伝うことは勝手だが、火口や近所の道に立ち集まってはいけない。 今後そのような者で消防や往来の妨げになっていれば、火事場役人より、主人及びその者の姓名を問いただし、場合によってはただちに捕り押さえることもある。これを心得、間違いがないように家来まで必ず申し付けること。

表1:達に引用された禁令

度禁じる法令を発布したので、家中の者に触れる事」となる。ここでの火元見は主に、大名が家臣を火元の見分に遣わす事を指す。史料には従来発布した法令が引用されており、これを(表1)にまとめた。文政12年～天保15年に最低3度は火元見の禁令が出ているが、文政12年の禁令に「前々も」とある事から、以前も禁令が出ていたとわかる。さらに、禁令の内容自体は、最初は単に火元見の禁止であったが、天保15年正月発布のものは「場合によっては捕り押さえる事もある」と処罰についてまで言及している。

各藩の家臣が火元へとやってくれば、人が集まり消防の妨げとなる。ましてそれが、馬を連れてくるのであれば尚更だ。幕府が火元見を禁じたのも当然の事である。しかし大名家からしてみれば、火災は自藩の屋敷まで延焼する恐れがあり、消防活動の上でも、火元見は一刻も早い情報収集をする上での必要手段だったろう。そう考えれば、火元見が中々無くならなかった事もうなずける。「達」からは、両者の譲れない事情が窺える。
(高野美佳)

【注】

- (1) 鈴木淳『町火消たちの近代 東京の消防史』吉川弘文館、1999年
- (2) 内藤昌『江戸と江戸城』講談社学術文庫、2013年
- (3) 池上彰彦『江戸火消制度の成立と展開』西山松之助編『江戸町人の研究』第5巻、吉川弘文館、1978年
- (4) 明治時代、司法省によって編纂された江戸幕府の法令集。石井良助編『徳川禁令考』前集第三、創文社、1981年
- (5) 明治大学博物館所蔵、内藤家文書3-12-83「達」(火事ノ節火元見多ク出テ消防ノ障ニナルタメ)
- (6) 大目付廻状は、幕府が大名に発布した法令を、大目付が大名家に廻状の形式で回したものの。廻状を受け取った家では内容を写し取り、次の家へ回した。

明治大学博物館と南山大学人類学博物館の協定事業も7年目を迎えました。今秋も各館の特色あるコレクションを相互に出展する交換展を開催します。明治大学会場(博物館常設展示室)では、2015年に南山大学人類学博物館に寄贈され、文化人類学者の西江雅之氏がアフリカや東南アジアで収集した仮面や神像などの民族資料を展示します。東京では初めての公開となります。一方、南山大学会場(人類学博物館展示室)では、明治大学博物館が収蔵する茨城県の代表的な埴輪資料として知られる、玉里舟塚古墳の形象埴輪と円筒埴輪を出展します。東海地方では大型の形象埴輪は少なく、比較研究の点からも貴重な機会となります。

◆明治大学・南山大学収蔵資料交換展示 2016年10月1日(土)～11月6日(日)◆

「交錯する視線
-文化人類学者 西江雅之の歩き方-」

明治大学会場
(明治大学博物館常設展示室)

ギャラリートーク「西江雅之の『歩き方』講座」

日時:10月8日(土)15:00～16:00

参加費無料・申込不要

講師:鈴木智子(南山大学人類学博物館学芸員)

会場:明治大学博物館



《魔女ランダの仮面》
インドネシア、バリ

悪と暗黒の象徴である魔女ランダの仮面。神体として寺院に祀られ、儀式劇に用いられる。

「はにわのまつり
-玉里舟塚古墳の埴輪の世界-」

南山大学会場
(南山大学人類学博物館)

ギャラリートーク
「よみがえる埴輪のまつり
-茨城県玉里舟塚古墳の埴輪群像-」

日時:10月22日(土)15:15～16:15

参加費無料・申込不要

講師:忽那敬三(明治大学博物館学芸員)

会場:南山大学人類学博物館



《矛を構える武人埴輪》(上半身はレプリカ)

国内で唯一の例。特殊な冑をかぶり、顔は赤色で化粧し、つま先まで鉄の小さな板を縫い合わせた武具(灰色で彩色した痕跡がある)を装着する。上半身と下半身を別々に製作する特殊な技法を用いており、全高は120cmに達する。

図書室から



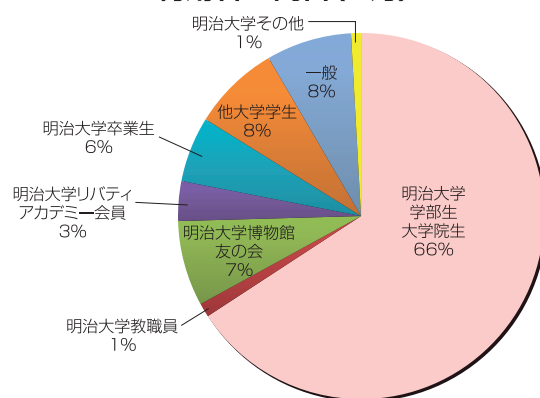
図書室からでは、博物館併設の図書室に関することや図書についてご紹介します。今回は、博物館図書室の利用状況についてとりあげます。

どなたでも利用可能な博物館図書室ですが、具体的にどのような方々が利用しているのでしょうか?7月の利用者(572人)の割合を見てみると、グラフのようになっています。利用者の約70%が明治大学の学部生、大学院生です。中でも、考古学専攻の学生がレポート前、試験前、卒業論文前などに多く利用します。また、他大学の学生も約10%利用し、駒澤大学などの関東近辺の学生が利用しています。一般の方も約10%の利用がありますが、中央省庁、市の教育委員会の職員の方、日本考古学協会の方、博物館の職員の方の利用もありました。

博物館図書室には考古・刑事・商品の3部門に関連する図書85,798冊、雑誌2,940タイトル(2016年3月時点)が排架されており、大半を発掘調査報告書が占めています。他の図書館ではなかなか見ることができない貴重な資料を多く排架していますので、興味のある方はぜひ、ご利用下さい。

◆開室時間:平日・土曜 10:00～16:30
(日曜、夏季休暇、冬季休暇を除く)

利用者の割合(7月)

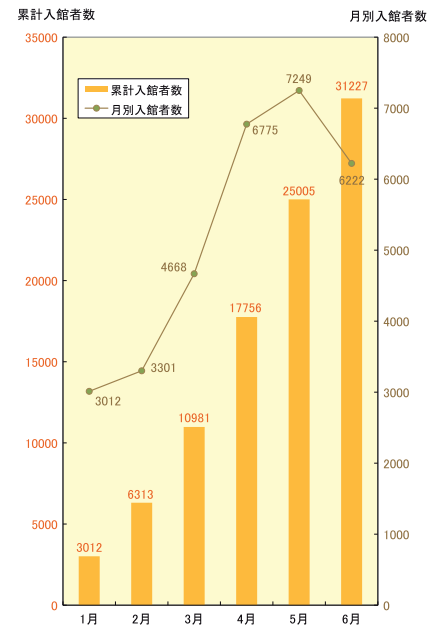


博物館入館者数の動き (2016年1月～6月：延べ人数)

2004年4月以降の
総入館者数累計 **802,938人**

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	2,156
教室等利用者数	2,031

特別展来場者内訳		開催日数	来場者数
3/26～4/24	冒険家・植村直己 単独行	30日間	3,003
4/29～6/8	新収蔵・収蔵資料展2016	41日間	3,206
6/18～7/20	譜代大名内藤家と戦 —内藤家文書をつづじて—	33日間	2,096



団体見学の記録 2016年1月～6月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

- 【一般】** ハマセン09(15名)／クラブ・オーバースワン(10名)／花と公園めぐり(20名)／船橋地区保護司会 広報部会(10名)／稲毛スカイタウン自治会 東京散歩の会(15名)／所沢三田会(10名)／一步の会(30名)／歴史散歩の会(20名)／特定非営利活動法人連想出版(15名)／いわき南地区更生保護女性会常警方部会(26名)／長野滔声会(31名)／東京みち草散歩会(10名)／NHK文化センター 横浜・水戸教室(19名)／NHK文化センター さいたま教室(22名)／KG同窓会東京45年会(16名)／クラブツーリズム東京新発見旅 千代田区(44名)／東村山明交会(24名)／やちくりけん佐倉(30名)／学生プロジェクト(100名)／いきがい大学蔵学園9期校友会 史跡クラブ(13名)／相模原市文化財調査普及員考古班(9名)／流山史跡探訪友の会(17名)／史跡と自然の会(16名)／毎日新聞旅行(23名)／神奈川県高等学校文化連盟社会科専門部(30名)／さいたま市図書館友の会(30名)／長門住区センター(34名)／上野国立科学博物館ボランティア有志(21名)／曹洞宗長野県第2宗務所第6教区(12名)
- 【小・中学校】** 豊島区立千川中学校(18名)／中野区立北中野中学校(5名)／大田区立安方中学校(38名)／江戸川区立篠崎中学校(24名)／長野県長和町中学生(20名)／大船渡市立越喜来中学校(9名)／京丹後市立久美浜中学校(26名)／かえつ有明中学校(110名)／あま市立甚目寺中学校(7名)／杉並区立中瀬中学校(90名)／御殿場市立御殿場中学校2組(33名)／横浜市立上永谷中学校2年生(14名)
- 【高等学校】** 保善高等学校(30名)／八王子高等学校マスコミ研究部(6名)／茨城県立水戸第二高等学校(42名)／正則学園高等学校(50名)／共愛学園高等学校(40名)／水戸葵陵高等学校(45名)／宝仙学園高等学校 女子部(38名)／千葉モードビジネス専門学校 高等課程(8名)
- 【大学・大学院・専門学校】** 昭和音楽大学 学芸員課程(16名)／共立財団日語学院(19名)／東京法律専門学校(27名)

M2 カタログ

好評!「古墳Tシャツ」が新色にて引き続き発売中!

玉 里舟塚古墳の埴輪をモチーフにした「古墳Tシャツ」に新色ショコラが登場しました。年代性別を問わず好評だった前回のチャコールグレーに引き続き、今回のショコラもベーシックなカラーで、どなたでも着こなせちゃうのが嬉しいポイントです。サイズはS・M・Lと取り揃えていますが、数量限定なのでお早めにお買い求めください。埴輪が好きな方、デザインで差を付けたい方にもおすすめの一品です!



価格:S・M・L全て1,100円(税込)

博物館友の会主催行事について

明治大学博物館友の会は、博物館のご協力の下にボランティア活動や自主的な生涯学習をすすめる会員が集う場です。2016年7月末現在500名を越す会員を擁し、各種活動を活発に行っています。今回は活動の一つである友の会主催の行事について紹介いたします。

■友の会主催行事について

会では講演会、見学会、会員の発表会等を計画、主催しています。行事への参加は会員のみならず一般の方も自由に参加できるように広報しています。

■講演会・会員発表会について

講演会は年間通じて実施しています。シリーズとして考古学の各時代をふくむ古代史講演会を年間3回程度、その年話題となった発掘の事例や研究者を紹介する日本考古学20xx(9月実施)、また、近世やテーマを設定した講演会を年間数回実施しています。また、会員の自主的な積極的な研究を促す場として、会員発表会を年1回開催。会員は特典として、友の会主催の講演会・会員発表会には全て無料で参加できます。

■見学会について

見学会は年間1~2回の宿泊見学会、年間2回の会員自身の案内による地元見学会、江戸時代を探訪する等を実施しています。これらの見学会は会員、博物館学芸員や全国で調査・研究を推進している明治大学OBのご協力を得て、案内が充実しています。今年度後半期の行事予定は下記の通りです。(変更の場合あり)

■ 今後の行事予定 ■	
2016年 10月	見学会 12(水)~14(金) 宿泊見学会「信州の遺跡と産業遺産をめぐる」<2泊3日>
11月	講演会 5(土) 第8回古代史講演会 講師:常松幹雄氏(福岡市埋蔵文化財課)「九州の甕棺と王墓」 見学会 30(水) 第21回会員案内による地元見学会「江東を歩く」(案内)高橋幸子・戸田政徳会員
12月	講演会 24(土) 講演会 講師:瀬川拓郎氏(旭川市博物館館長)「アイヌ考古学の魅力」
2017年 1月	見学会 13(金) 「江戸時代を探訪するpartV ~神田上水を巡る」
3月	講演会 4(土) 会員発表会&講演会 講師:黒澤浩氏(南山大学教授) 講演会 18(土) 第9回古代史講演会(予定)
4月	見学会 第22回会員案内による地元見学会(予定)

詳しくは明治大学博物館に備えています「入会のご案内」「分科会のご案内」または明治大学博物館HPから「明治大学博物館友の会」の各項目を参照してください。

【明治大学博物館友の会 連絡先】

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館 友の会 /メールアドレス meihakutomonokai@yahoo.co.jp
※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ずハガキまたはメールをお願いします。

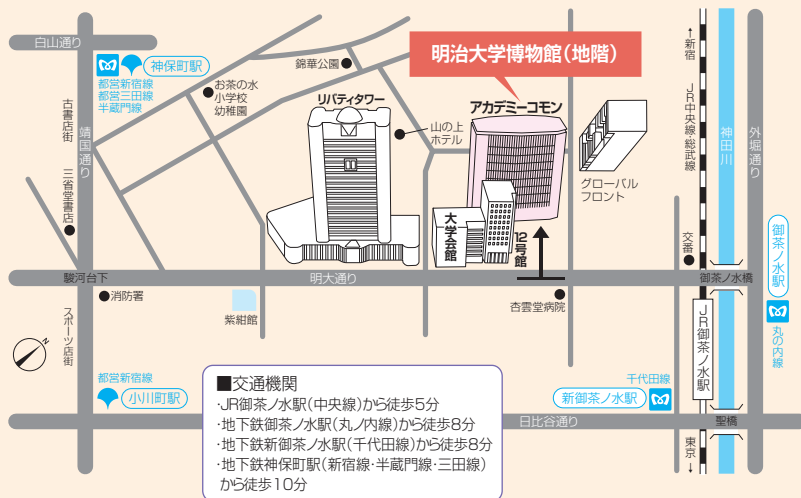
博物館案内

博物館案内

- ◆開館時間
10:00~17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10~8/16)
冬季休業日(12/26~1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月~土 10:00~16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
- ※図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



編集後記

今号の特集では、『密着!博物館の仕事』ということで、普段うかがい知ることのできない博物館の舞台裏について紹介しました。展示の裏側には、博物館を運営していくための様々な活動があることを知っていただけたらうれしく思います。